

イスラーム神秘思想の源流——神名解釈としてのイスラーム思想史——

澤井 真（人間科学専攻）

本研究の目的は、イスラーム神秘思想の源泉であるクルアーンの解釈、とりわけ、「アダムの物語」の解釈を通して、イスラーム思想史を神名解釈の視点から捉えなおそうとすることにある。そのことによって、スーフィーたち神秘思想家がいかにかそれらの解釈を自らの議論に取り込んで、彼ら独自の思索を紡ぎ出していったのかを考察する。

イスラーム神秘思想の研究では、これまで「スーフイズム」と「イスラーム神秘主義」という枠組みが用いられてきた。両概念は、イスラーム教の内部と外部による共働の結果として、イスラーム神秘思想という言説空間を形成してきた。本研究では「スーフイズム／イスラーム神秘主義」と表現することで、研究の分析概念とした。また本研究では、特に「ナラティヴ」の次元に関して、イスラーム神秘思想の源流であるアダムを取り巻く一連の記述群を、「アダムの物語」と呼ぶことで、クルアーン解釈がいかにか多層的に展開されてきたのかを分析するための視座を設定した。

初期のクルアーン解釈において、先導的な役割を果たしたタバリーは、自らのクルアーン解釈において、前代の伝承を吟味することを通して、適確な解釈を導き出すことによって、クルアーン解釈の客観性を維持しようとした。こうした視点は、生と死に関する彼のクルアーン解釈のなかに見出すことができる。タバリーの「原初の契約」に関する解釈に関する理解を踏まえて、「醒めた」スーフィーとして知られるジュナイドの思想に焦点を当てた。ジュナイドは神的合一の状況を説明するために、「原初の契約」を用いるかたちで自らの思索を深めた。彼は、「ファナー」（消滅）と「バカー」（存続）というスーフィーの専門用語を用いて、神的合一へ到る道程を論じた。さらに、クシャイリーは神学的・神秘主義的視座から、生と死に関わる神名解釈を通して、本来的に併存しない生と死が神との一体化を通して逆説的に結びつく状況を示すとともに、生と死のはざまを止まることなく揺れ動きながら沈潜していく状況を論じていた。

イブン・アラビーは存在一性論において、全く異なった神名論を展開する。彼の存在一性論は、それ以前の「タジャッリー」（自己顕現）概念に、一者から多者への絶対者の存在論的自己顕現という新たな意味を付加した。存在の最も純粋なレベルにおいて、純粋存在はいかなる言葉でも形容することができない。すなわち、存在一性論において、アッラー（神）とは存在における頂点に位置するものではない。むしろ、「アッラー」の神名は、絶対者の自己限定の過程を通して顕われたものである。彼はこうした自己限定の意味で、「タジャッリー」の語を用いた。

神名において、「アッラー」の名は100段階の神名における最初の名称である。絶対者の自己顕現を経て顕れる「慈悲」は、全ての神名に、名前の本質——「モノ性」や「名前性」——となるものを与える。そこで、存在一性論において、名前とはその結果として可視的に現われたモノとみなされる。さらに、「主」という神名は、主従関係を表わすものであり、奴隷たる人間の存在を必然とする。こうした神と人間のあいだの主従関係は解消することはできないが、被造物同士の主従関係は解消することができる。こうした理解にもかかわらず、イブン・アラビーは、両者の主従関係を解消することを可能とする存在を示唆する。その存在こそが、イブン・アラビーの「完全人間」に関する議論であった。

完全人間は、神がアダムに凡てのモノの名前を与え、彼を自らの似姿で創造したゆえに、世界における特権的地位に立つ。彼は神の宝庫の封印し、神の神秘知を保持する存在であるがゆえに、地上の代理者と呼ばれている。彼の子孫である人類はさまざまな特質を継承するが、霊的な高さは本質的に付随したのではなく、獲得されていくものである。イブン・アラビーは、預言者ムハンマドの唯一無二という叡智に関して、彼が使徒の封印であり、「ムハンマド的実在」というかたちで、アダムに先行する存在論的特権性をもつとみ

なした。このとき、アダムの時間的先行性は、存在一性論の自己顕現において、ムハンマドの存在論的先行性にとって代わられる。ムハンマドの死後、人々は聖者性と隠された神秘知を通して、真知者である完全人間を目指し、世界を維持する存在となる。このとき、聖者たちは預言者の継承者であり、彼らは真知者として、神の叡智を維持することによって世界を存続させる。

スーフィーたち神秘思想家は、クルアーンを源泉とし、ハディース、さらに先行するイスラーム諸学に基づきながら、自らの体験に根差す思索を深めていった。その際、「アダムの物語」は神と人間のつながりを見出すための契機となり、さらに神名解釈は神とのつながりを深化させる重要な手がかりであった。こうした意味で、イスラーム思想史とは、彼らがイスラーム神秘思想の源流へと絶えず回帰することによって、クルアーンの新たな解釈の地平を拓いた営為の蓄積であった。

論文審査結果の要旨および担当者

提出者	澤井 真
論文審査担当者	<p>(主査) 教授 鈴木 岩弓 教授 木村 敏明 教授 戸島 貴代志 准教授 山田 仁史 東京大学教授 鎌田 繁</p>
論文名	<p>イスラーム神秘思想の源流—神名解釈としてのイスラーム思想史—</p>
<p>本論文は、「序」と「結論」の間に三部九章からなる本文を配して構成される。</p> <p>第一部では、本論で行うイスラーム神秘思想研究の理論的枠組みが提示される。「第1章イスラーム神秘思想をめぐる言説空間」では、「神秘主義」概念が、1990年代からの宗教学における「宗教」概念再考の流れに呼応するように展開したこと、また「スーフィズム」概念がイスラーム教の内や外に位置づけられた流れを受け、本稿の対象を「スーフィズム／イスラーム神秘主義」と表記することが述べられる。「第2章井筒俊彦のクルアーン分析の視座」では井筒を参考に、神の啓示であるクルアーンの特徴を明らかにし、アダムを取り巻く記述群、「アダムの物語」に焦点を絞り、ナラティヴの次元からクルアーン解釈を分析する本論の視座を提示する。そして「第3章イスラーム思想の源泉としての『アダムの物語』」では、多様な記述・解釈からなるナラティヴの「アダムの物語」が、スーフィー達の解釈学的想像力にとって重要な意味をもち、イスラーム神秘思想の源流と位置づけられることを指摘する。</p> <p>第二部ではスーフィー達の所論を通じ、クルアーン解釈の多層性を考察する。「第4章イスラーム教の死生観—タバリーのクルアーン解釈における2つの生と2つの死—」では初期クルアーン解釈に先導的役割を果たしたタバリーの、生と死に関するクルアーン解釈がまとめられる。次にタバリーの「原初の契約」解釈を踏まえたジュナイドの思想が「第5章ジュナイドの『原書の契約』におけるファナーとバカー」で取り上げられ、「原初の契約」というモチーフを用いた「ファナー（消滅）」と「バカー（存続）」から神的合一への道程がまとめられる。「第6章生と死のはざまで—クシャイリーの神学的・神秘主義的神名論—」では、クシャイリーの生と死に関わる神名解釈において、神の名前である「生を与える者」と「死を与える者」から、スーフィーの生と死が神との一体化を通して逆説的に結びつき、また生と死の挟間を揺れ動きながら沈潜していくことが述べられる。</p> <p>第三部ではイブン・アラビーの存在一性論を取り上げ、新しい神名解釈を通じたクルアーン解釈の革新性が考察される。「第7章存在一性論における神名」では、イブン・アラビーの存在一性論におけるタジャッリー（自己顕現）概念の展開が考察され、「名前とは何か」の問いに対する存在一性論の立場を明らかにする。次の「第8章イブン・アラビーの神名論における存在の自己顕現」では、神名との関わりの中で絶対者が自己顕現を通していかに開示されるかが考察され、「アッラー」「主」「慈愛あまねき者」の三種の神名から存在一性論における神と人間を明らかにする。「第9章つながりの哲学—靈的權威としての完全人間—」では、神名を体現した完全人間に対する考察から、聖性を帯びた完全人間がいかなる靈的權威をもつ存在であるかを考察する。</p> <p>以上より、スーフィー達はクルアーンを源泉としつつハディースなどを参考に思索を深めていったこと、その際「アダムの物語」は神と人間のつながりを見出すための契機となり、神名解釈は神とのつながりを深化させる手がかりであったことが明らかになり、イスラーム思想史とは、イスラーム神秘思想の源流へと絶えず回帰することでクルアーン解釈の地平を拓いてきた営為の蓄積であると結論づける。</p> <p>本論文でなされた、イスラーム神秘思想の流れを従来看過されてきた神名解釈から捉え直すとした試みは斬新である。訳語の付け方に若干検討の余地が残るとはいえ、未公開の文献資料をも渉猟して分析した点は意欲的で、全体的に見れば質の高い論文に仕上がっている。よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	